# キリシタン宗教書における仏教語の問題

鈴　木　広　光

**目次**

1．導言
2．corpo, carne の翻訳の実態
3．「色身」の原義と国内文献の用例
4．キリシタン宗教書における「色身」の用法
5．corpo と「色身」の共通点――物質としての肉体――
6．quatro elementos の訳語「四大」について
7．「色身」と「身（み）」「からだ」
8．結論
付説　carne の訳語「骨肉」について
1．キリシタン宗教書における「骨肉」の用法
2．国内文献にみえる「骨肉」
3．carne の象徴的意味と訳語「骨肉」の採用

**1．** 16世紀に来日した外国人宣教師によって，欧文原典から翻訳されたキリシタン宗教書に仏教語が多用されていることは，既に先学の多くが指摘するところである(注1)。キリシタンはガゴの用語改革以来，キリスト教の本質的な教理に関わる概念は翻訳せずに「本語」（原語）で示すという布教方針を確立したが(注2)，その方針はキリシタン文献にも持ち込まれた。しかしながら一方では，宗教書の基本的な文脈は仏教語に基づいている。

仏教語の採用は大略，文体と意味の両側面からその理由が説明されよう。キリシタン宗教書では，翻訳にあたって「内典」つまり法語・談義系統の俗文の文体が採用された。森田(1985)は，ロドリゲス『日本文典』の「内典」の文体の記述(注3)やフロイスの「仏僧の説教方法」に関する報告をひき，宗門書が日本人の間に権威をもって迎えられるためにはこの文体が必要であり，教義の根本に相容れない点があるとはいえ，現世厭離，欣求浄土を説く点では相通ずる点もあると認めたことから，「内典」の文体を採用したのではないかと解釈している。そして，この文体が採用された結果，その宗教書の用語には多くの仏教語が使われたとのべている。また意味的側面からは，橋本(1928) の「佛教語を多く用ゐたのは，此の書が基督教の教義を説いたものである爲であって，此の新来の宗教が，その教義を説明する場合に，なるべく日本人

の耳に親しい佛教上の言葉を假り用ゐたからである」という指摘がある。実際の翻訳では意味・文体の両側面から訳語の検討がなされ，これらは截然と分けられるものではなかったであろう。橋本の指摘にはそのようなニュアンスがある。

ところで，この仏教語の採用については，「当時の日本語においては抽象的で思弁的な語彙は仏教語しかなかった必然」(注4)と見るか，あるいは仏教語を媒介にしてキリスト教理解に役立てたり，日本の精神的風土にキリスト教を根付かせる為の積極的な同化方針のあらわれと見るか，評価が分れるところである。この問題に関しては，それぞれの仏教語に対する具体的な検証が必要になってくるであろうし，またそのような作業によって，キリシタンの仏教理解及び，日本語でのキリスト教受容の在り方も明かになってくるだろう。

小論は以上のような観点から，キリシタン宗教書の原典において人間の肉体をあらわす言葉として使われている corpo, carne の訳語に仏教語「色身」が採用されたその理由をさぐろうとするものである。

**2．** キリスト教の教理内容を表わす言葉などは，抽象度が高く，その言葉が用いられてきた社会や文化の精髄，人々の思考様式に密接に関連するために，翻訳に困難を伴うことが容易に想像される。一方，具体的な事物を指示する言葉の場合，翻訳に関わる社会の内に相当する事物があれば，翻訳に伴う困難の度合いは抽象語ほど高くはないであろう。しかし，ある事物を指示する言葉がただ一つであるとは限らない。言語が世界を分割する方法は，事物の分類原理と必ずしも一致するわけではないのである。人間の肉体も事物としてはそれそのものであるが，日本語の歴史のなかでは常に複数の語が機能し，それぞれの語が違ったやり方でこれを把握してきた。肉体をあらわす言葉は現行の邦訳聖書では「体」(ギリシャ語 sōma の訳)，「肉」(sarx の訳) が用いられているが，キリシタン宗教書で，原語 corpo (体，スペイン語では cuerpo)，carne (肉) に対してどのような訳語が採用されているのか。本節ではこの点について概観し，問題の所在を明かにしておこうと思う。

宗教書の原典と訳書を比較して，corpo(cuerpo)と carne の翻訳の実態をみることにする(注5)。サンプルとして『どちりいなきりしたん』の翻訳の実態をみてみよう。資料は原典と訳文で対応がみられるものに限定しておく。(数字は用例数)

| | | | |
|---|---|---|---|
| corpo | 色身 7 | 色体 2 | 色相 1 |
| carne | 色身 1 | にくたい 1 | |

その他，原語と対応を示さないが，肉体をあらわす語として「身」があらわれる。小島 (1987) の調査によると，『ロザイロの観念』における corpo, carne の訳出状況は以下のようになっている。

corpo　色身 4　　ご色身 17　　ご皮肉 1
corporaes　色身の 2
carne　色身 2　　身 1　　御肉 1　　ご皮肉 2

これらの調査から明かなように，「色身」の用例が非常に多い。この傾向は原語との対応を示さない語についても同様である。『ヒイデスの導師』『コンテムツスムンヂ』『ぎやどぺかどる』についてもcarneの訳語として「骨肉，肉，肉身」などがみられるのを除けば，同じような傾向を示す。

それでは，corpo（cuerpo），carneの各訳語は，それぞれある条件（原語の意味の違い）によって訳し分けられたものであろうか。結論から述べるならば，そうであると言い切れるような明確な差異は見出し難い．（ただし，carneの訳語「骨肉」はcorpoの訳語には採用されていない．「骨肉」の採用については，**付説**。で詳しく述べる。）ここで特に問題となるのは仏教語「色身」「色体」と和語「身」との違いであろう。語形はかなり異なるもののやはり明確な差異は見出し難く，以下のように同じ文脈で使われている（ともにcarneの訳語）。

しかのみならず心の自由をからめ天狗と世界と身の悪しき望みの奴となる者也。

（ぎやどぺかどる　上23ウ）

天狗と世界の両敵は色身を使ひ道具として我等に諸悪を興す事。

（ぎやどぺかどる　上83ウ）

以下では，仏教語「色身」（「色体」もあるが「色身」で代表させる）と和語「身」に焦点を絞って考察をすすめていきたい。訳語「色身」と「身」の間に差異は見出し難いが，用例数の上では「色身」の方が多い。抽象的な概念であれば，仏教語を取り入れざるを得なかったであろうが，肉体に対してなぜことさら仏教語を導入する必要があったのだろうか。その理由のひとつとして，宗教書が「内典」の文体を採用したことがあげられるが，必ずしも文体の要請が決定的な要因となったとは考えにくい。亀井他（1983）の指摘にあるとおり，『どちりなきりしたん』では，前期版にあらわれる「回向」「安心決定」「解脱」「入滅」などの仏教的表現は後期版にいたって取り除かれ別の表現に改変されている一方で，前・後期一貫して用いられる「教化」「現世」「後生」「慈悲」のような語があり，「色身」は後者に含まれる。つまり，「色身」はキリシタン宗教書において肉体をあらわすための基本的な用語になっているのである。このような改変方針からみても，「色身」が単なる文体の要請のもとに採用された仏教語とは思われない。むしろ「身」をはじめとする他の訳語よりも，「色身」の方がcorpo, carneが指示する言語内容をより適格に表現し得る語と認められたからではないだろうか。この点について以下に検討を加えていこうと思う。

3．ここで仏教語「色身」の原義について概観しおこうと思う。「色身」は中村（1975）によると（ここでは本論に関わる記述のみ抜き出して引用する）「物質的な身体。肉身。肉体としての身体。地・水・火・風・など物質的要素でできている肉身，肉体。生れながらの身体。生身。すがたかたち。」のように説明される。「色」は「物質。物質一般。物質的存在。形質をもち，生成変化する物質的現象」であり，「色身」とは肉体をそのように認識したことばである。典型的な用法として「色身モトヨリ実体ナシ，五蘊カリニ建立ス，四大分散シテ後ナニヲサシテカ我トセン」（塩山和泥合水集　中）のような例が国内文献から得られる。「四大」は地・水・火・風の四元素のことで，あらゆる物質はこれらの元素から構成されている。「四大色身」ということばが示すように，肉体もまた「四大」が和合したものである。

4．キリシタン宗教書における corpo（cuerpo）の訳語「色身」の典型的な用法は，「あにまを離れたる色身は命を保つことかなはず。」（ぎやどぺかどる　上82オ）「されば此等の物には動かされ手は色身なり，動かす精はアニマなり。この証拠にはアニマは色身を離るれば動き働くこともかなはぬものなり。」（ヒイデスの導師　f. 4）のようなものである。「色身」は「あにま」（anima）と対立する存在であり，かつ「あにま」なくしては「動き働くこともかなはぬ」形骸的な存在にすぎない。

carne つまり〈肉〉はその象徴的用法として，人間の罪の状態を体現するものとしてあらわされることがあるように，マイナスのイメージで用いられることが多く，spiritu（espiritu）や alma（anima）の敵として厳しく対置される。また，carne の形容詞 carnal に〈世俗的な・現世中心的な〉の意味があるように，地上的・世俗的なものとしてあらわされたりもする。キリシタン宗教書の「色身」（carne の訳語）にもそれは明らかで「弟　我等がてきとは何たる物ぞ／師　世界天狗色身これ也」（どちりいなきりしたん　11オ）「世界我に敵をなし天狗われにほえて色身はあにまに敵對といふとも御身に頼みをかけ奉るべし」（ぎやどぺかどる 上79オ）のように用いられ，「世界」（mundo の訳語）「天狗」（demonio の訳語）と同列に扱われている。

以上の「色身」の用法は，キリスト教における〈体〉（corpo）や〈肉〉（carne）の位置付けがそのまま訳語「色身」に反映したものである。しかし，宗教書の用法と「色身」の原義を比較しても，共通点はみられない。そして，ここからだけでは corpo の訳語に「色身」を採用しなければならなかった必然性をうかがうことはむずかしい。さらに深く原語 corpo, carne の意味，さらには中世神学における肉体の位置付けをさぐりながら，「色身」との共通点を明らかにしていこう。

5．corpo（cuerpo）は，人間の肉体をあらわすことばであるのと同時に，生命のない物質をあらわす語でもある。corpo, corporal が materia, material と sinonimo の関係にあることからも，

人間の肉体を物質と同次元で把握していることがうかがえる。この点に着目してみると，corpo が「色」「色身」の概念と非常に似ていることは容易に気付かれるであろう(注6)。 3．で概観したように，「色身」は物質的な身体，地・水・火・風・空など物質的要素から出来ている肉体であり，仏教の側も肉体を物質と同次元で把握していた。 ここから「色身」は corpo がもつ〈物質としての肉体〉という概念を移植するために採用された訳語ではないかと推測される。 ただし，corpo と「色身」の間にこのような共通点が見出されるからといって，それをそのまま訳語採用の理由と考えることには慎重でなければならない。 なぜなら，上の事柄はあくまで個別言語同士の比較から指摘される共通点だからである。 翻訳とは原典のテクストのなかで言い表された事柄を別の言語手段によって表現することであり，言語体系内の意味論的対立によってのみ価値をもつ個別言語的意味は翻訳できない(注7)。 したがって，宗教書の原典における corpo が〈物質としての肉体〉をあらわす「色身」(あるいは「色体」) の採用を要請した何らかの徴証を原典と訳書の中に求めなければならない。

6．中世の自然神学においては，自然界の秩序をアリストテレス，プトレマイオス以来の四元素説に基づいて説明するのが通例であった。 そこでは万物を構成しているものは土，水，空気，火の四元素であり，人間の肉体もまたこの四元素から成るものと考えられていた。 四元素については，Granada, F. L. de の Quinta parte de la Introduction del Symbolo de la Fe の capⅣに De los quatro Elementos として詳しく説かれているが，訳書『ヒイデスの導師』ではこの題目を「四大の事」と訳している。 キリシタンは四元素 quatro elementos を仏教語「四大」で受けとめたのである(注8)。この quatro elementos と訳語「四大」が，corpo と「色身」を結びつける鍵ではないだろうか。 次のような訳出例はそれをうかがわしめる。

De los compuestos de los quatro Elementos. Cap. V.
(Quinta parte de la Introduction del Symbolo de la Fe　f. 25)
第五　四大を以て合せたる色相の事（ヒイデスの導師　f. 53）

ここでも quatro elementos の訳語に「四大」が採用されているが，注目したいのはその四元素の compuestos（複合体・構成体）の訳語として「(以て合せたる) 色相」が採用されていることである。 「色相」とは「色（物質）の特質。外に現れて見ることのできる色身のすがた」のことであるが，compuestos の語自体は〈物質〉の意味をもたないから，この訳出は quatro elementos「四大」と「色」の関係を考慮してなされたものではないかと考えられる(注9)。「四大」によって構成された「色相」に関する記事は既に『どちりいな きりしたん』(1591年加津佐刊前期版ドチリナ国字本) に「しきさうある物は四大よりわがうのものなるによてまてりあと云事は一るひなれども正体はかつかくなり」(31オ) のように見えている(注10)。 一方，『ぎやど

ぺかどる』では,

Esta immensidad infinita de Dios declara Sancto Thomas en el compendio de la Theologia, por este exemplo. Veemos (dize el) que entre las cosas corporales, quanto vna es mas excellente, tanto es mayor en quantidad. (Guia L Ⅰ. cap Ⅰ. f.8)

是に付てさんとます譬を引て云く，四大皆勝れたる程大き也。 (ぎやどぺかどる 上7ウ)

のように cosas corporales の訳語に「四大」が採用されている。『日葡辞書』では「色相」が「Cousa corporal, ou que tem cor, ou figura」と説明されており,『ぎやどぺかどる』の例は corpo 及び「色」との関係を考慮のうえになされた訳出であると考えられる。以上の訳出例から，quatro elementos によって構成された物質としての肉体 corpo と，地・水・火・風という物質的な元素「四大」から成る「色身」との対応関係が見てとれるのと同時に，corpoの訳語として「色身」(あるいは「色体」) が採用された理由も明らかになるだろう。「色」という概念 (及び語形) は，corpo の〈物質的な元素によって構成された〉という概念をあらわすために必要とされたのである。

7. ここで,「身 (み)」について検討を加えておこうと思う。和語「身」には肉体の意味のほかに，代名詞としての用法もある。宗教書の翻訳にもその点については明かで,『コンテムツスムンヂ』では代名詞 ipse が「(我が) 身」と訳されている。このように「身」は一語の中に代名詞の用法までも含むために，具体的な文脈を離れては肉体そのものを指示しているかどうかも漠然としてしまう。この点から言えば,「身」よりも「からだ」の方が，corpo の訳語にふさわしい意味内容をもっていた。佐竹 (1968) では,「仏法ヲ明メント思フ心モ，自ワスレハテヽ，只身ハカラダバカリノ立ハタラクガ如クナル時，サトラント思フ心モナキニ，タチマチニ夢ノサムルガ如クナル時アルベシ」(月庵法語) の「からだ」が「身」とは区別されていることに注目し，その違いについて述べている。佐竹氏によれば「からだ」は,「たましい」や「こころ」が抜けた形骸的な肉体であり，生体のみに用いられる「身」とは峻別される。したがって，中世では「からだ」はしばしば死体の意味で用いられていた。上の例における「からだ」は生体をあらわしているが,「こころ」が抜けて死体と同じような状態であり，それ故「身」とは区別される。「からだ」は,「あにま」なくしては「動き働くこともかなはぬ」corpoと非常に近い意味内容をもっていたといえよう。しかし，この言葉は宗教書で用いられるべき文体に適合しないものであった。「からだ」は『日葡辞書』にも登載されているが(注11)，注意したいのは『日葡辞書』がこの語を「B (卑語)」と認定していることである。そして，この注記と符合するように『羅葡日辞書』の訳語やキリシタン宗教書に「からだ」はあらわれない(注12)。「卑語」という注記の範囲をどのように解釈すべきかという検討も必要になってくるだろうが，宗教書にはふさわしくない，キリシタンの規範意識に抵触する言葉であったことだけは確かで

ある。

話を「身」に戻そう。もともと「身」の用法には肉体を物質と同次元で把握したり，物質的要素の構成体とみるような理解はみられない。しかし，仏教的色彩の強い文脈でも，「色身」の代りに「身」を用いている場合がある。例えば「元来この身は地水火風の假物にして，我と云べき物なし」(反故集 巻之上) では「地水火風の假物」という表現から明らかに仏教の思想が読み取れるが，「色身」ではなく「身」が用いられている。このように文脈の側から「身」に物質的要素の構成体という意味を担わせることも不可能ではなかったであろう。実際，『サントスの御作業』では，「四匹の悪龍とは，人の身は地 (ツチ)，水 (ミズ)，風 (カゼ)，火 (ヒ) を以て抱ゆる血気痰黄水の事。この四つの加減そこねて，死するといふ心なり。」(巻一 f. 260) のように四元素から成る人間の肉体に対して「身 (み)」を用いている。また，原典の全ての corpo や carne が〈物質として肉体〉の意味を訳語の側に要求しているわけではない。「色身」ばかりでなく，「身」(また「骨肉」など他の訳語) もそれなりに用いられている理由をここに求めることができるかもしれない。

**8**．しかしながら「色身」のほうがより多く採用されたのは，**6**．で検討したように，「四大」や「色相」など他の訳語との関連から，corpo の表わす内容や中世神学における〈肉体〉の位置付けをより体系的に把握できるようにと考えた訳者の配慮によるものではないかと考えられる。原語 corpo, carne が指示する物は必ずしも抽象的な概念ではなく，具体的な〈肉体〉である。したがって，「色身」の採用に限っていえば，仏教語を採用せざるを得なかったとする評価はあたらない。むしろ現実には仏教とは対決しながら，一方で教理の本質に関わる概念以外はできる限り仏教語を媒介としようとした，キリシタンの教理移植の方法がここに現れているのではないだろうか。

## 付説　carne の訳語「骨肉」について

**1**．本論が仏教語を中心にすえたものであったために，直接扱い得なかったけれども，付説として carne の訳語「骨肉」について検討を加えておこうと思う。キリシタン宗教書における「骨肉」の用法は以下のとおりである。

①肉体

生得骨肉はスピリツに敵對といへども，我が色身のナツウラにはづれてかほど喜ぶもの也。

(ヒイデスの導師 巻2 f. 184)

②肉欲，現世における欲望

此枷といふは人を罪の奴となす骨肉の邪なる望みを指ての儀也。(ぎやどぺかどる 上88オ)

③肉親

されば人の上には骨肉の父母二人の外なしといへども，スピリツアルの上には又もあるものなり。 (サントスの御作業 巻1 f. 3)

我等を御糺明なさるべきキリシトは我が骨肉の親よりも尚御大切深き御主にて在しませば，いかばかりか頼母敷かるべきやと観ぜよ。 (スピリツアル修行 f. 224v)

④人間

風に靡く実もなき竹にすがり頼むことなかれ，その故は諸の骨肉は芝草なり，その栄花も野辺の花の如く散るべき也。 (コンテムツスムンヂ f. 109)

2.「骨肉」という語自体は国内文献でも珍しいものではなく，「骨肉トハ何ソ，文選注ニ謂ク父子トイヘリ」(塵袋) とあるように，血縁関係や肉親をあらわす語として用いられた。『塵袋』の記述からもわかるように，この用法が中国にまで遡るために，字義通りの〈骨と肉〉あるいは，キリシタン文献にみられる〈肉体〉の用法を国内文献に求めることは，なかなか困難である。例として，『史記抄』の「以爲肥而蓄精ー肥ヘヒチライテ身ヲモハタラカサス骨肉カホヱテ不任ホトニ喘ソ」(巻十三 57) や，「身 (しん) ハ是，地水火風ノ四大，カリニヨリアヘリ。堅キ骨肉等ハ地ヌレタル所ハ水，アタヽカナルハ火，ウゴクハ風ナリ。」(沙石集 巻五末) などがあげられる(注13)。キリシタン宗教書の「骨肉」の用法と国内文献のそれとを比較すると，①③は国内文献における用法と同じであるが，②④は国内文献に確例は得られない。特に「骨肉の望み」という表現は宗教書に多くあらわれ，『日葡辞書』にも「cotnicu no nozomi. Desejos da carne. (肉欲)」として登載されているが，管見の限りでは国内文献にその用例は得られない。②の用法は，carne を「骨肉」と直訳したために，〈肉〉以外の用法が翻訳文に反映した，いわゆる翻訳臭の強い表現であると考えるべきであろう(注14)。その分だけ carne と「骨肉」の結びつきの強さを感じさせるが，その理由をどこに求めるべきであろうか。『羅葡日辞書』にあたってみても，「Caro, nis. Lus. Carne, ou sustancia de peixe. fruiitas. etc. Iap. Xiximura, nictai, vuono mi, l, conomino mi」とあって，carne の訳語として「骨肉」は採用されていない。また carne は〈肉〉であって〈骨と肉〉ではない。そこで，carne のキリスト教文化圏における象徴的意味について，さらに検討を加える必要がある。

3. Blaise (1954) でラテン語 caro (肉) の項にあたってみると，キリシタン宗教書における carne「骨肉」の用法が，既に聖書の中に見えていることがわかる。中でも注目したいのが la chair, la race, la pareté, la fillation naturelle (et non spirituelle) である。『サントスの御作業』は原典が確定できないので，③における「骨肉 (の父母)」の原語はわからないが，聖書の caro には肉親の用法があることから，キリシタンはこの用法に目をつけて carne の訳語に「骨肉」を採用したのではないかと考えられる(注15)。carne の形容詞 carnal に，同父母同祖父からでた，

血のつながったという用法があることも付け加えておこう。

旧約の『創世記』(2.23) では，神が自分のもとに連れて来た女（イブ）に，アダムがもう一人の自分を見出すという場面がある。ここでアダムが言った言葉が hoc nunc os ex ossibus meis et caro de carne mea. haec vocabitur virago quoniam de viro sumpta est「ついに，これこそ　わたしの骨の骨　わたしの肉の肉。これをこそ，女（イシャー）と呼ぼう　まさに，男（イシュ）から取られたものだから。」(新共同訳による) であった。この言葉が拡張されて〈肉〉が肉親に対しても用いられるようになった。例えば，Optarem enim ipse ego anathema esse a Christo pro fratribus meis, cognatis meis secundum. (AD ROMANOS 9. 3)
「わたし自身，兄弟たち，つまり肉による同胞のためならば，キリストから離され，神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。」(ローマの信徒への手紙9. 3) の secundum carnem に肉親の意味が込められていることは明らかである。このように見てくると，「骨肉」は『創世記』(2.23) のアダムの言葉を念頭におきながら採用された訳語ではないかと考えられる。東洋と西洋で，表現の心理が同一方向に向いていることは興味深いが，carne の〈肉親〉と「骨肉」の〈肉親〉は背景的にかなり異なることに注意したい。carne が spiritu と対立することは既に述べたが，先の carne の象徴的用法もその原理に貫かれている。carne の親族関係は「spiritual ではなく natural な」ものであり，超自然的存在，精神的存在である神 Deus との親子関係ではなく，現世的，肉体的な意味での親子関係である。『サントスの御作業』の「人の上には骨肉の父母二人の外なしといへどもスピリツアルの上には又もあるものなり」の「骨肉」は確かに〈肉親〉の意味で用いられているが，同時に上記の背景を踏まえて解釈されるべきものである。

キリシタン宗教書の「骨肉」は，キリスト教文化圏における〈肉〉carne の象徴的用法までも考慮にいれて（あるいはその共通点が採用の決定的な要因となって）成立した訳語であった。

## 注

(1) 村岡 (1926)，姉崎 (1932) などによって指摘されてきた。

(2) 土井 (1974) 参照。

(3) ロドリゲスは「内典」の文体について「この文体は宗門のあらゆる解説書に用ゐられる。民衆へ説教する時の文体も，救世に関係する事を書いたものの文体もすべて甚だ荘重であって，取扱はれた内容の如何によって程度の差はあるが，わかりにくいところがある。'坊主' (Bonzos) はこの文体を日常の話し言葉に適応させながら説教に使ふのである。日本語に翻訳した我々の書物もこの文体を用ゐたものが普通に行はれて居り，説教に於いても，この文体の単語や言ひ表し方が適するので，我々はこの文体に頼ってゐるのである」(『日本文典』184 v 訳文は土井 (1955) に拠る) と述べる。

(4) 小峯 (1990)。

(5) 対照に用いたキリシタン宗教書とその原典を掲げておく。

○『どちりいなきりしたん』(1591 加津佐 国字本 ヴァチカン図書館蔵 勉誠社文庫)
Doctrina Christã Ordenada a maneira de Dialogo, pera ensinar os mininos (Lisboa, 1602 大英図書館蔵 亀井ほか (1983) 複製本)

○『ヒイデスの導師』(1592 天草 ライデン図書館蔵 鈴木博編 清文堂複製本)
Quinta parte de la Introduction del Symbolo de la Fe (Salamanca, 1588 豊島正之氏所蔵 写真)

○『コンテムツスムンヂ』(1596 ボドレアン文庫蔵 勉誠社複製本)
De Imitatione Christi Antverple 1647 (天理図書館蔵写真)

○『ぎやどぺかどる』(1599 ヴァチカン図書館蔵 豊島正之氏御所蔵のフィルムを拝見させていただいた 他に大英図書館蔵 福島邦道編 勉誠社複製本参照)
Guia de Peccadores (1573 大英図書館蔵 豊島正之氏御所蔵のフィルムを拝見させていただいた)

以後に用いる他のキリシタン文献については,『サントスの御作業』『羅葡日辞書』『日葡辞書』『羅西日辞書』『日本文典』が勉誠社複製本,『スピリツアル修行』は林田明編・風間書房影印による。また『バレト写本』は『キリシタン研究 第七輯』による。

(6) コリャードの『羅西日辞書』では, Corpus materiale, cuerpo material に「色身」の訳語があてられている。

(7) コセリウ (1976) 参照。

(8) キリシタン文献における訳語「四大」の例をあげておく。『サントスの御作業 巻一 サンバルランとサンジョサハツの御作業』では「カルデアの國には四大を以て本尊とす。これ甚だ迷ひなり, いかんとなれば, 人に使はるる為にデウス作りおき給へばなり。」(f. 267) とあり, この「四大」にたいして「言葉の和げ」に Quatro elementos の注がある。『羅葡日辞書』に「Elementa, orum. Lus. Elementos. Iap. Gi sui qua funo xidai. (地水火風の四大)」とあるように「四大」は単なる elementos の訳語でもあった。『コンテムツスムンヂ』の「こゝに天もあり, 地もあり, 萬物を作り給ふ根本の四大もここにあり。」(巻1. 第20. f. 58) の「四大」がそれである。Ecce caelum, & terra, & onima elementa; ex istis nam que onima sunt facta, (De Imitatione Christi Ll. cap 20. f. 58)

(9) compuestos 自体に〈物質〉の意味はないが, corpo (cuerpo) は compuestos (複合体・構成体) として把握されていた可能性がある。Cobarruvias (1611) は cuerpo について que se forma de diversas cosas compuestas y concertadas entre sí, de que materialmente resulta, como la casa, la nave, etc という興味深い記述を残している。

(10) この部分は原典と目される M. Jorge の Doctrina Christã には見えず, 日本人信徒向けに付加されたものであると考えられる。『どちりいなきりしたん』は, ここで質料形相論に基づき, 万物の差別についての説明を展開している。また, 後期版『どちりなきりしたん』では, 説

明をさらに詳しくするためにこの部分には全面的に改訂が加えられている。このスコラ学的質量形相論は既に Alexandro Valignano 編の『日本のカテキズモ』(1586 Lisboa) の第 2 講に見えている。『どちりいな』ではこの質量形相論のすぐあとに「此等の事をくはしく分別したきとおもふにをひてはかてきずもにのせたる事をよまるべし」(31オ) とあるが，海老沢 (1970) は，この「かてきずも」とは従来言われてきた『ヒイデスの導師』ではなく，Valignano の『日本のカテキズモ』ではないかと推定している (『どちりいな』がそれ自体カテキズモでありながら，それとは別のカテキズモの参照を指示していることから)。原典にはない『どちりいな』の「まてりあ・ほるま」の説明も『日本のカテキズモ』(または現存しないが既に日本のイエズス会で成立していたカテキズモ) を参照して盛り込まれたものではないかと考えられる。いずれにせよ日本におけるカテキズモの系譜や『どちりいなきりしたん』の成立を考える上で興味深い事柄といえよう。

(11) Carada. Corpo morto. Algũas uezes se toma por corpo viuo. B.

(12) キリシタンのローマ字文献に carada が見えないことについては，既に豊島 (1987) に指摘がある。問題になるのは国字文献の方であるが，例えば「御身は諸の体と命の源にてまします也」(ぎやどぺかどる 上10オ) の「体」は ser (実体，存在) の訳語であり，むしろ「たい」と読むべきものである。豊島 (前掲) では，ローマ字文献に carada が見えないことを根拠にこれを「たい」と読んでいる。このような例を省いていくと，キリシタン文献に「からだ」の用例はなくなる。

(13) 『沙石集』は渡辺 (1966) 梵舜本 (慶長二年書写) による。『慶長十年古活字本』には「骨肉」の語はみえない。

(14) 直訳，機械的な翻訳の例としては，豊島 (前掲) が指摘する「其貧を大切におもふ事善となる也」(ぎやどぺかどる下41オ) があげられる。氏はこの訳出について，「大切」を神・人以外に用いた珍しい例であり，amor を機械的に「大切」と訳したかと述べる。

(15) 『マタイ福音書』に Beatus es, Simon Bariona, quia caro et sanguis non revelavit tibi, sed Pater meus, qui in caelis est. (16.17)「シモン・バルヨナ，あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは，人間ではなく，私の天の父なのだ。」という一節がある。新共同訳では caro et sanguis を「人間」と訳しているが，Blaise (1954) はこの caro を la chair faible, corruptible と解釈している。『バレト写本』にもこの一節の翻訳があり，そこでは「いかにバルジョナシモン汝の骨肉告げざれども天にまします我が御親知らせ給ふによってベアトなり」(f. 88v) のように caro et sanguis は「骨肉」と訳されている。バレトはこれに対して qetnicu (血肉) sãguis, carne のように明らかに原語を意識した注を付しているが，翻訳者が「骨肉」を採用したのは，Pater meus「我が御親」との対で caro et sanguis に肉親の意味を読み取ったためではないかと考えられる。

**(補注)** 本論においては行論の便宜上，専ら corpo に対して「色身」が採用された背景につい

て考察し，carne と「色身」の関係については明らかにしていない。個別言語のレベルでいえば carne は〈肉そのもの〉をさす言葉であり，corpo のような〈物質的要素の構成体〉の意味をもっていない。但し，宗教書の原典においてはこの二つの語はしばしば同じ意味で用いられており，carne の訳語として「色身」が採用されたのは corpo からの類推ではないかと考えられる。また『羅葡日辞書』では「Corpus, oris. Lus, Corpo ou carne.」とあり，この訳語に「色身」も採用されている。

## 参 考 文 献


Blaise, Albert (1954) Dictionnaire Latin-Français des auteurs chretiens. Turnhout, ed Brepols.

Cobarruvias, Sebastian de. (1611) Tesoro de la Lengua Castellana o Española. Madrid, ed, Turner.

Weber, Robert (1983) Biblia sacra iuxta vulgatam versinem. Stuttgart, Deutsche Biblegeselschaft.

姉崎正治 (1932)『切支丹宗教文学』(国書刊行会の復刻1976による)

コセリウ．E (1976) 翻訳論における誤った設問と正しい設問『コセリウ言語学選集 4 ことばと人間』三修社 1983

土井忠生 (1940) キリシタン版に現はれた用語『カトリック大辞典Ⅰ』冨山房

(1955)『ロドリゲス 日本大文典』 三省堂

(1974) 16.17世紀における日本イエズス会布教上の教会用語の問題『キリシタン研究 第15輯』吉川弘文館 (『吉利支丹論攷』1982 三省堂に所収)

海老沢有道(1970)キリシタン宗門の伝来 『キリシタン書・排耶書』日本思想体系25 岩波書店

(1978) キリスト教と日本宗教との交渉総説 『季刊 日本思想史』No. 6 ぺりかん社

福島邦道 (1979)『サントスの御作業 翻字・研究篇』 勉誠社

橋本進吉 (1928)『文禄元年天草版 吉利支丹教義の研究』東洋文庫論叢第九 (岩波書店復刻 橋本進吉著作集11 1983 による)

市川白弦 (1972)「塩山和泥合水集」『中世禅家の思想』日本思想大系16 岩波書店

家入敏光 (1969)『日本のカテキズモ ヴァリニャーノ』 天理図書館参考資料第七

亀井孝，チースリク,H.,小島幸枝 (1983)『日本イエズス会版 キリシタン要理』 岩波書店

小峯和明 (1990) 中世文学の範囲 『中世文学』35号

小島幸枝 (1987)『キリシタン版 スピリツアル修行の研究』 笠間書院

(1989)『キリシタン版 スピリツアル修行の研究 資料篇』 笠間書院

森田 武 (1985)『室町時代語論攷』 三省堂

村岡典嗣 (1926)『吉利支丹文学抄』 改造社

中村 元 (1975)『佛教語大辞典』 東京書籍

佐竹昭広 (1968) 意味変化について『言語生活』第204号

豊島正之 (1987)『キリシタン版 ぎやどぺかどる 本文・索引』 清文堂

渡辺綱也 (1966)『沙石集』日本古典文学大系85 岩波書店

深井一郎 (1980)『慶長十年古活字本 沙石集 影印篇』 勉誠社


**謝辞** 『ぎやどぺかどる』，Guia de peccadores 他御所蔵の貴重なフィルムを拝見させて下さった北海道大学の豊島正之氏に深謝申し上げます。